

# 17世紀の遺跡から出土する煎茶道具

稲垣正宏

## The Tea Sets in 17th Century Sites of Japan

INAGAKI Masahiro

17世紀代、長崎では清朝からの渡来僧による寺院が次々の創建され、寺院の行事や習慣に伴う喫茶（煎茶）も伝来した。

また長崎に来住する唐人は大陸にいたころから煎茶に親しんでいたようであるので、長崎では寺院・唐人・町人を問わず煎茶が普及したらしく、市内の町屋遺跡（築町遺跡・桜町遺跡）から煎茶道具が出土している。

京都には福建省から渡来した（黄檗宗の開祖）により煎茶が伝えられた可能性があり、隠元の信者や交友関係を通じて煎茶が広まったことが分かる。

しかし、煎茶道具は貴族の御所に隣接する公家町屋敷跡からしか出土しておらず、長崎ほどの普及状況でないことが分かる。

京都に煎茶が普及するのは高遊外（賣茶翁）が煎茶の啓蒙活動を始める18世紀になってからのことである。

キーワード：築町遺跡、桜町遺跡、黄檗宗、急須、高遊外

### 1. 飲茶の歴史

縄文時代以来、中国文化の影響を受けてきた日本においては茶文化についても同文化の影響下にある。同国では唐代（団茶－固形茶）、宋代（抹茶）、明・清代（葉茶）と生産される茶の形状が変化している。唐代の団茶については火で炙ってほぐした上で湯に投げ煮たうえで上澄を飲むのであるから、基本的には煮茶である。

奈良時代・平安時代は日本でも上記の煮茶が行われたようであるが宋・元代になると抹茶が盛んになり南宋・元に渡航し帰国した日本僧や元の攻撃による混乱から逃れ来日した中国僧のよって抹茶の製法、飲茶法が日本に導入された。

しかし、柗津宗伸氏の研究<sup>1)</sup>によると鎌倉・室町時代の禅宗寺院の一部では煮茶による飲茶法が行わ

---

1) 柗津宗伸『大鑑清規と五山文学における喫茶の諸形態——中世信濃からの視角——』

れており、さらに時代を下る江戸時代においても一般家庭や茶店では薬罐に茶葉を投じて煮出す煮茶が行われていたようである。

中国では明代になると急須で茶を淹れる煎（淹）茶方<sup>2)</sup>が出現する。田芸衡の『煮泉小品』嘉靖三十三年（1554）には茶を「甌（急須）の中で湯に浸す」とあり、許次紆の『茶疏』万曆三十年（1602前後）には龔（供）春、時（大）彬作の茶壺（急須）の存在が記されており<sup>3)</sup>煎茶法が確立してきたことが分かる。また、『茶疎』には煎茶茶碗は定窯（北宋時代に現河北省に築かれた窯、白磁が有名）のものが最もよく明代の宣徳窯、成化窯、嘉靖窯が次ぐと記されている。

## 2. 17世紀の煎茶を取巻く状況

隠元隆琦（1592年～1673年）は中国福建省福清県清遠里にある黄檗山万福寺（古黄檗）の住持であった。古黄檗は唐の貞観5年（789）開山の古刹で隠元は明の崇禎十年（1637）に晋山した。一時退山したが明の滅亡による混乱の中で再び古黄檗に入山したが日本にいた中国僧の招きにより順治十一年（1654）来日することになった。

慶長18年（1613）幕府からキリシタン禁令が発布され長崎に住んでいた唐人（中国人）達もキリシタンでないことを証明する必要が生まれた。唐人達の中では故郷（明）から僧を呼んで唐寺を作る動きが出てきた。長崎三福寺の内、福濟寺は寛永五年（1628）に福建省泉州の僧により、崇福寺は寛永六年（1629）福建省福州の僧により、興福寺は寛永元年（1624）江西省饒州出身の僧新円により創建された。

隠元は順治十一年（1654）に鄭成功が仕立てた船で20人の弟子を連れて長崎に来航し、興福寺に入った。明暦元年（1655年）に東上し撰津島上（高槻市）の普門寺の住持となり、寛文元年（1661）山城宇治に創建された黄檗山万福寺の住持となった。寛文四年（1664）には退山し寛文十四年（1674）示寂した。隠元の連れてきた弟子の内10人は帰国したが10人日本に残った。また隠元の入朝後来日した弟子もいた。

もともと長崎は唐人（中国人）が多く中国文化の移入も多く行われていたが、京都においては万福寺の開山により多くの人士が万福寺を訪れ本場の黄檗宗の禅に触れ、僧俗の往来の増加により、中国僧が実践する中国の煎茶に親しむ機会も増えることになった。以下大槻幹郎氏の著作<sup>4)</sup>に従いその一端を記したい。隠元は煎茶に親しみ飲茶にちなんだ漢詩も作っている。また、隠元の弟子月潭道澄（1636～1713）は元禄二年（1689）古義学で有名な伊藤仁斎に招かれ煎茶を飲み漢詩を作っているがその中に「・・共酌鑑中顧渚春」（顧渚は湖州－現浙江省呉興県－産の名茶）という句がある。月潭は元禄四年

長野県立歴史博物館研究紀要第9号2003年3月

2) 急須に茶葉を入れ湯を注ぎ茶を注ぎだすことを淹茶法というが煎茶法も同じ意味で使われているので、淹茶＝煎茶ということで同法を煎茶法に統一する。また急須についても茶罐、茶壺、茶甌などさまざまな異称があるが分かりやすいように急須という言葉に統一したい。

3) 布目潮風 中村喬『中国の茶書』東洋文庫289 平凡社 1985年6月1日

4) 大槻幹郎『煎茶文化考 文人茶の系譜』思文閣出版 2004年2月25日

(1791)には京都の富商名波九郎左衛門に招かれ煎茶を楽しんでいる。万福寺二代住持木庵（1611～84）は宇治の茶師上林正矩の茶を愛で漢詩を送っている。

江戸中期の関白・摂政太政大臣を務めた近衛家熙（予楽院）の日記「槐記」<sup>6)</sup>の享保十年（1724）正月九日には「近代ノ親王家ニ、獅子吼院殿程ノ人ハアルベシトモ覚ヘズ、榮才ノ上ニ、骨ヲ折ラレシ故ニ、天台一宗ニ於テハ、中興トモ謂ツベキ人ナリ、（中略）詩モ数寄ニハアレドモ、三菩提院殿ナドノヤウニ、強チ骨ヲ折ラルルニテモナケレドモ、詩集アリ、重テ見スベシ、歌ト茶湯ハ大ノ嫌ヒニテ、俳諧ハ名人ナリ、（中略）一生薄茶モ参ラズ、煎茶ノミナリ、何トヤラン云フ真壺アリシニ、常ニ浅草海苔ヲ入レテ賞シテ、最ハシヤギテ好シト称セラル、塩ノ染ミテ、アタラ壺ノ廢レント云シニ、壺ハ我が壺ナリ、何ノ惜シキコトカアラント仰ラル（以下略）」\*獅子吼院殿 御水尾天皇第八皇子（1639～1695）

とある。京洛の人士が身分を問わず黄檗僧に交わり茶を楽しんでいたことがうかがえるが、抹茶をきらい煎茶しか喫まない皇族まで出現していたこともわかるのである。

### 3. 長崎出土の煎茶道具

長崎市内では2箇所の遺跡で煎茶道具が出土している。（第一図）

#### ①築町遺跡<sup>7)</sup>

築町遺跡は長崎の中心部である細長い台地の西側の低地に位置する。天正十三年（1585）頃には造成されていたと推測される。遺跡には長崎の大災害である寛文三年（1663）の大火災の焼土層が確認されており、煎茶道具もその焼土層から出土している。焼土層からは中国江西省景德鎮窯産の染付碗・皿、鉢、白磁皿福建省漳州窯産の色絵皿・鉢染付碗、ベトナム産の焼締陶器瓶・長胴瓶、肥前産の染付碗・皿・鉢、唐津碗・皿・三彩鉢、高取産と思われる茶入などとともに宜興紫泥急須（第2図-1 以下2-1と略）が出土している。宜興紫泥急須は蓋付きで口径7.2cm高さ6.6cm、器高11.0cmである。色調は暗い紫色で胎土はきめ細かい、口縁内面を削って調整している。蓋も色調・胎土はと同じで、口縁端部を削って調整している。同焼土層からは宜興急須の蓋と考えられるものが2点出土している。

なお宜興窯は江蘇省宜兴市にある陶器窯で起源は北宋代までさかのぼる。明代嘉靖年間（1522～1566）に供春という茶壺（急須）つくりの名人が現れ、また万暦晩期（17世紀はじめ）には時大彬という名人が現れたとされる。清代（17世紀後半）になると煎茶急須の生産が増加し日本にも輸出されている。急須には赤い土を使ったもの「朱泥」と黒紫色の土を使った「紫泥」の2種がある。

#### ②桜町遺跡<sup>8)</sup>

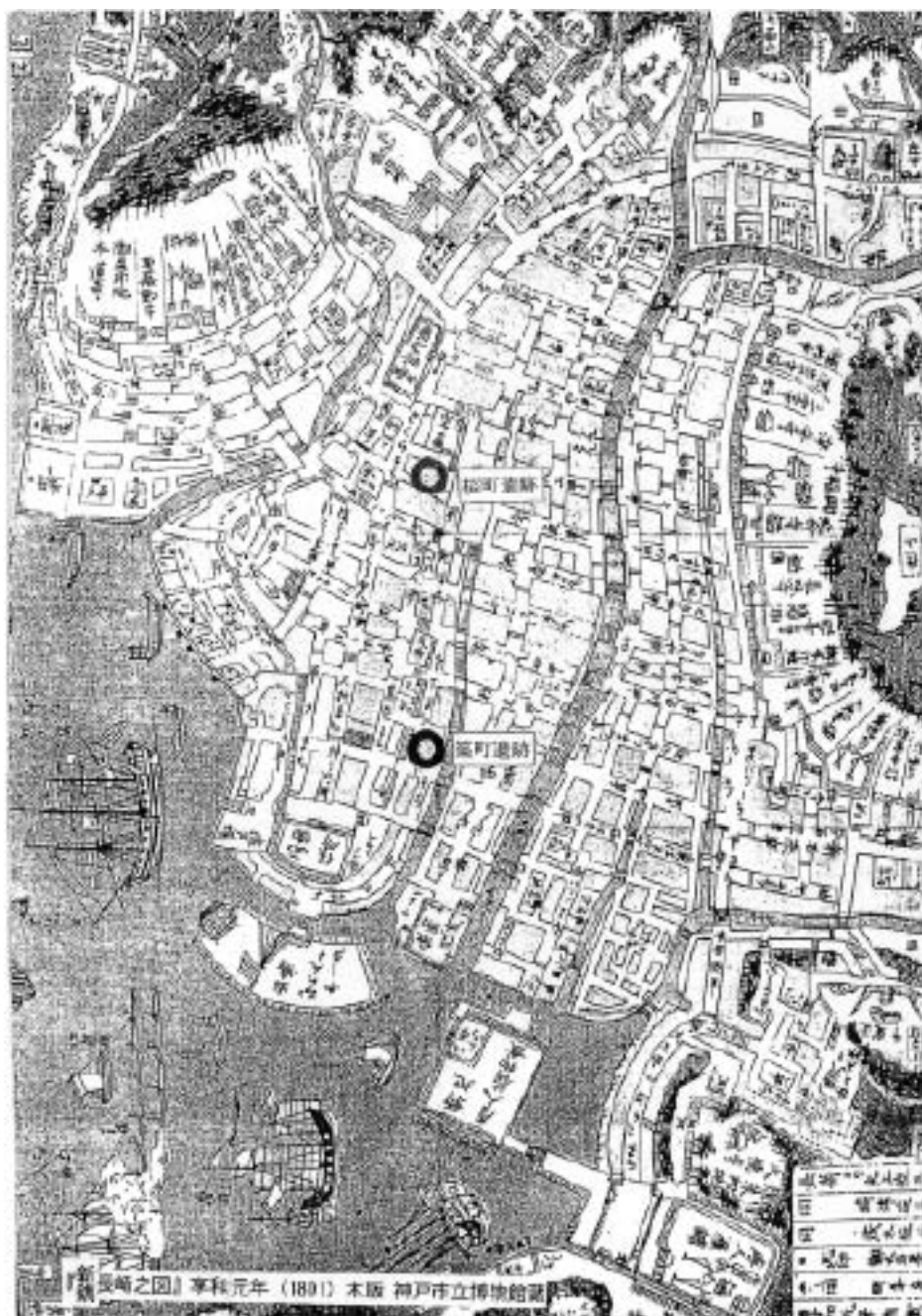
本遺跡の所在地である桜町は長崎の中心部である細長い台地の北部に位置する。文禄元年（1592）ごろの成立と言われ、慶長16年（1611）はサン・フランシスコ教会が建設されたが、徳川幕府によるキリ

5) 公案とは悟りを開くための入口になる文言である。趙州和尚の公案「喫茶去（まあ茶でも飲め）の意」は数ある公案の中でも著名である。

6) 柴田 実『槐記』茶道古典全集 第五巻 淡交新社 昭和三十三年九月二十日

7) 扇浦正義『築町遺跡』長崎市教育委員会 平成9年3月31日

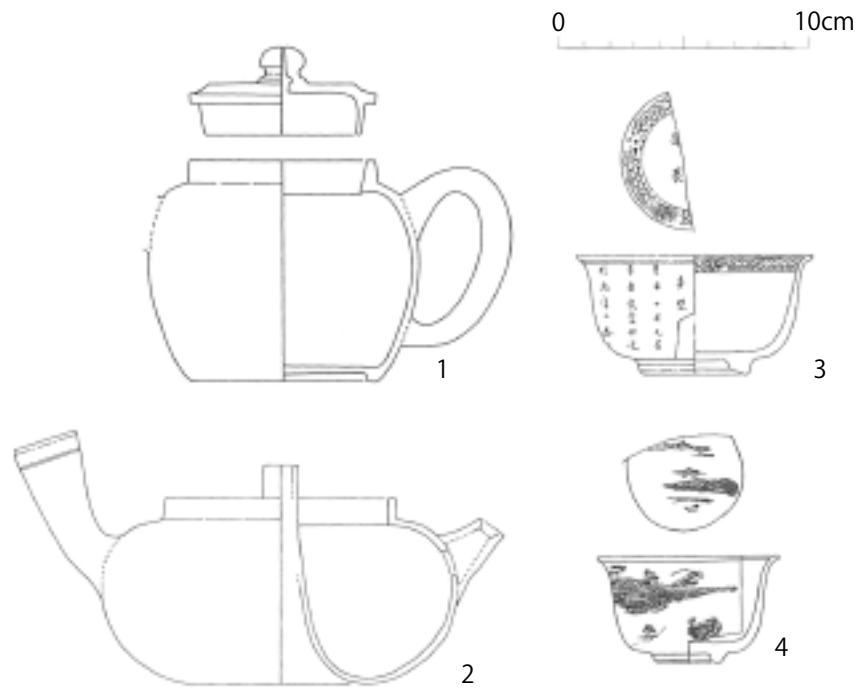
8) 扇浦正義『桜町遺跡』長崎市教育委員会 平成13年3月31日



第1図 煎茶器出土地点（長崎）

スト教の禁止令により、慶長19年（1614）に破壊された。調査地点は江戸時代の古地図によれば家持町人の屋敷地に当たっている。

煎茶道具が出土したのは42号土坑（土坑－人為的に掘り下げた穴）で中国江西省景德鎮窯産の染付碗・皿、福建省漳州窯産の染付碗、中部ベトナム産の土器、肥前産の染付碗・皿・鉢、唐津碗・皿・甕・壺・播鉢とともに宜興窯（現中国江蘇省宜兴市）産の朱泥穿心罐（2-2）1点と景德鎮産染付茶碗2点が出土している。この土坑一括出土品は肥前磁器等の編年から17世紀前半の一括資料と考えられる。



第2図 長崎出土煎茶道具

朱泥穿心罐（2）は中心部に通穴を設けた珍しい形状をしている。薄いレンガ色で推定口径9cm、高さ8.7cmで、丁度「火鍋」に使う鍋の形状に煮ている。型つくりで非常に薄手で口縁内面と取手の端部のみ削って調整している。底部外面には煤が付着しており直接火にかけて使用されたと思われる。火に当たる面が多く熱効率がよいので、湯沸しかもしれない。

（2-3、4）は煎茶碗と思われる染付端反碗で底部が露胎という清朝景德鎮磁器の特徴を現す。（2-3）は口径8.9cm、器高4.0cm、底径4.7cmで、外面に詩文がかかっている宋の蘇東坡が元豊五年（1082）冬十月に作成した「後赤壁賦」の一部が記されている。「赤壁賦」は前後二篇があるが何れも名文のため様々な芸術作品に記されている。当該茶碗にも小さな字が達者な筆致で書かれており高級な茶碗であったことが分かる。

（2-4）は外面に山水文が描かれている口径7.1cm、器高3.0cm、底径4.2cmと3に比べてやや小型である。口縁が端反の碗は片手に持って飲みやすいという特徴がある。上記2碗は何れも中国趣味の茶碗であり煎茶を飲むのにふさわしい。

#### 4. 京都出土の煎茶道具（第3図）

京都市左京四坊公家町は現在の京都御苑にあたる場所で明治時代以前は内裏に隣接し公家の居住する公家町として多くの公家たちが居住していた。京都迎賓館建設に伴う発掘調査により公家町の実態が明



第3図 煎茶器出土地点（京都）

らかになった。<sup>9)</sup>

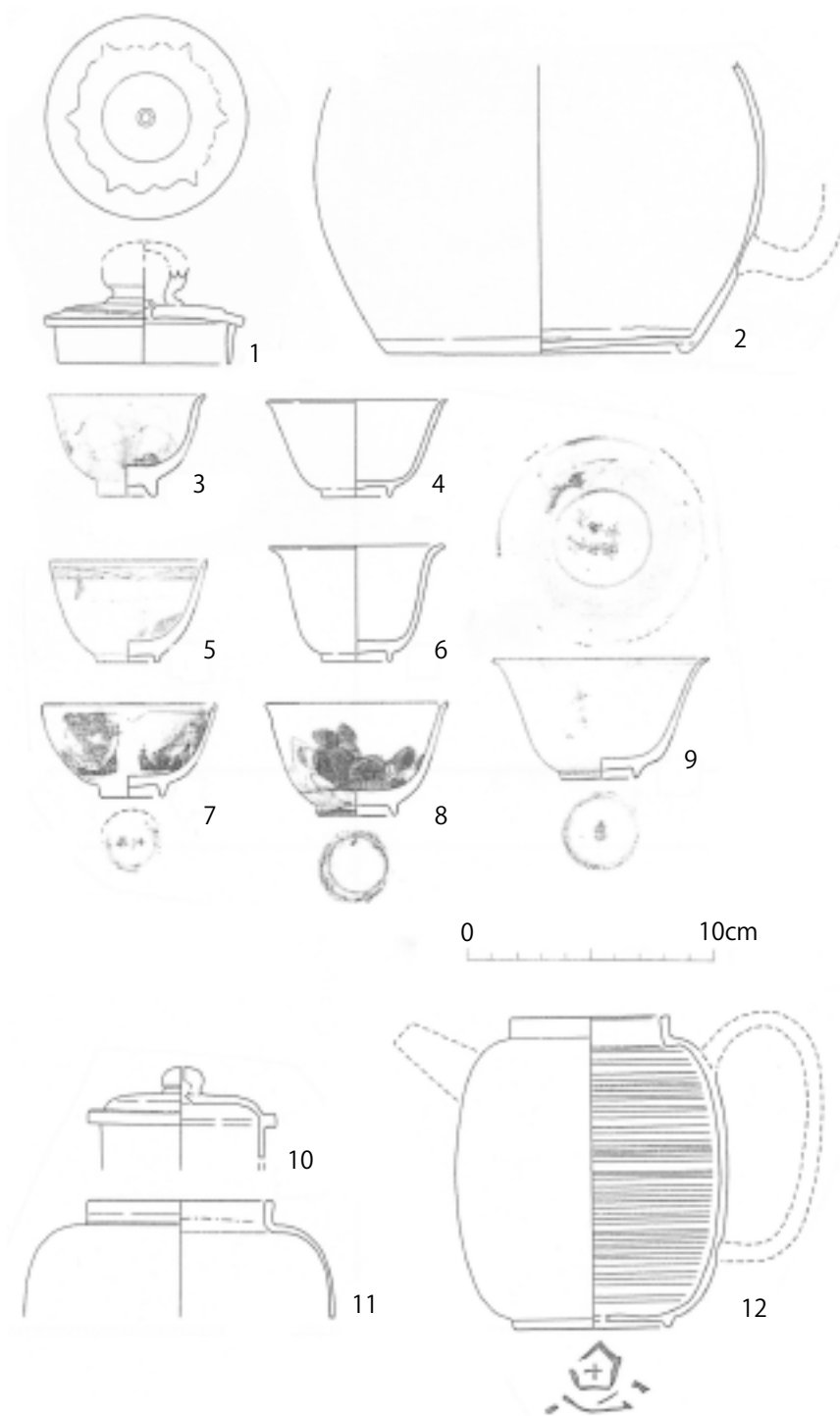
煎茶道具が出土した穴蔵G749、穴蔵G1128を含む部分は人為的に掘られた貯蔵施設らしい。『中むかし公家町の絵図』『寛永十四年洛中絵図』『洛中絵図寛永後万治前』の3種の絵図の中では「安禅寺御門跡」<sup>10)</sup>記された屋敷部分にあたる。門跡とは皇族・貴族が住職を勤める寺院またはその住職そのものの名で、多くの門跡寺院は公家町に御里坊と呼ばれる別邸を構えていた。

屋敷地内の穴蔵G749からは抹茶道具（瀬戸・美濃の茶入、天目、唐津碗、丹波建水、伊賀壺、上野・高取茶壺）、中国・ベトナムの陶磁器、ヨーロッパ輸出用の伊万里磁器等が高級品の陶磁器約8,000点が出土している。出土遺物の年代と埋没状況から寛文十一年（1671）の大火によって地下の穴蔵に収められていた陶磁器が焼けて廃棄された一括資料と考えられる。

宜興の朱泥急須蓋は口径6.6cmの大型品である。また朱泥水注が出土しているが、底径が12cmとか

9) 野芝 勉『京都市左片四坊公家町——第2分冊——（公家町）京都市埋蔵文化財研究所調査報告第22冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2004年1月30日

10) 御門跡とは皇族・貴族が住職を勤める特定の寺院あるいはその住職のことである。門跡は寺院とは別に公家町に御里坊という別宅を持つことが多かったので「安禅寺御門跡屋敷」も御里坊と考えられる。「安禅寺御門跡」の関連では『言継卿記』の永禄十一年（1568）十月十三日の条に安禅寺殿昌蔵主の名があるが、当該屋敷の主との関係は不明である。



第4図 京都出土煎茶道具

なり大型の製品で上部も欠けており用途は分かりにくいところがある。

煎茶碗については小口径の肥前産染付碗（4-3～9）の内（4-9）について同一のものが13点出土していることから報告者は煎茶碗の有力な候補としている。

また近隣の土坑G1128（17世紀末）からも宜興朱泥蓋（4-10）、宜興朱泥水注（4-11, 12）が出土している。宜興朱泥水注（4-11, 12）は何れも破片のため全容は分からない。

## 5. まとめ

17世紀の煎茶道具は長崎・京都のみで出土している。17世紀という時代背景を考えると16世紀代からの貿易港で中国渡来僧も多い長崎にまず煎茶が根付いたことが確認できる。築町、桜町両遺跡とも町人が居住していた場所であるので17世紀代の長崎の煎茶は町人層まで浸透していたことがよく分かる。

京都は公家屋敷跡で検出された「宝物藏」ともいえる高級な陶器が多く出土した。土坑から煎茶道具もわずかに混じって出土している。17世紀の京都が万福寺を中心とした煎茶ブームの中にあつたことは間違いないが、長崎のように町民にまで広く根付いていたとはいいいにくい。煎茶が大衆化していくのは高遊外（売茶翁）が通仙亭という移動式茶店をもって京洛内の各地に出向き煎茶普及活動に入った享保19年（1734年）以降のことであろうと思われる。

なお、遺跡出土急須が現在ウーロン茶を飲むのに使われているものよりかなり大振りだという印象を受けるかもしれないが、これは現在のウーロン茶の飲茶法が福建省を中心に行われていた工夫茶を起源とするからである。工夫茶では小さな急須に茶を入れると蓋をして上から湯をかけ暖めてから、蓋を取り中に湯を注ぎ、おもちゃのような小さな茶碗で飲むもので明代に起源があるともいわれているが、盛んになったのは清代とされる。